



インナーテラスから窓越しに眺める寝室。南仏の中庭のような雰囲気。商品撮影に重宝している

いう。「私は飽きっぽいから、飽きたら自分で塗り直せるように、木は無垢のままにしておきました。最初は白っぽかったのが、日に焼けてだいたい赤茶けてきて、塗らなくても自然に色が変わってきた。この色も気に入っていて、結局全然飽きないです」

リビングの床も、ささくれてこないようにオイルで磨くなど、日々の手入れは怠らない。天然素材というものは大事に

世界をつくるお手伝い

扱えば扱うほど、さまざまな表情を見せ代えてくれる。

最奥の小さな部屋はフレキシブルに使えるように設けたものだ。当初はゲストルームだったが、今はすっかりワークルームと化していた。ここに住んで四年目に個人事業主として独立したMさんが仕事に使っているのだろうか。「独立して最初の頃はここで仕事をし

てみたけど、やっぱり家だと集中できない。生活と仕事は分けた方が良いと思って結局外に小さい事務所を借りました」彼が手がけているのは、企業のコーポレート・アイデンティティなどのブランディングだ。「ロゴのデザインや、商品、パッケージなどのキーメッセージをつくるだけでなく、統一感を持たせて展開していく見せ方とか、戦略的なことも含めてご相談させてもらっています」

「打ちあわせで、大きな紙ものを広げたりする機会も多いから、やっぱり事務所の方がやりやすいですね」けれどこの部屋は、その後コロナ禍でNさんがリモートワークに使ったりと、何かと利便性が高い。静かなので読書や仮眠にも向いている。本棚には主にMさんの資料本やCDが並んでいた。

「でもほとんど事務所に持っていったので、ここにあるのは残ったものだけです」

実はこの家にある本は九割以上がNさんの本なのだ。インテリアもNさんの趣味色が強い。Mさんの事務所はわりとミニマムなデザインで統一されているらしい。しかし彼に不満の影は全くなく、むしろNさんが築き上げる世界を横で眺め楽しんでいられるように見える。

はずに構えたユニークな空間

それにしてもリビングには、二〇一四年に描いた俯瞰図と比べると、大量の本と小さな本棚がたくさん増えていた。

「前の家では扉付きの本棚に入れていて、仕舞い込むと読み返したりできなかった。再読したり、最初読んだときと全然違う！」みたいな確認を頻繁にやりたい。同じ本を二度買っちゃったりもするので、この家では絶対、全部見えるところにしておこうと思ったんです」

アトリエ壁の本棚や窓辺の棚は、すで



↑ サニタリールーム4の入口付近の壁には、お気に入り本や頂いた絵葉書もディスプレイ



挿し木を増やして育てたフィカス・ベンガレンシス
他に玄関と窓辺にも本棚がある。玄関は装丁が綺麗な新潮社のクレストブックス専用。窓辺の本棚は、読み途中の本や再読予定の本を収めている
キッチンカウンター下の本棚には、装丁の綺麗な本や、積ん読本を並べている。お気に入りのコレクションも

にほとんどの本が二重になり溢れる寸前だが、確かにだいたいすべてが一望できる。小さい本棚はジャンルというより、主に読書過程に応じて分別されていた。どうも話を聞いていくと、ぬいぐるみや雑貨にしても、本にしても、とにかく「一望にできる」ということを最優先して、この家はつくられている。それは物だけでなく、空間にも言えることだ。

天井は木材を取り払い、板痕の残るコ
ンクリートが剥き出しで見えている。そこに電気のコード類を束ねたパイプが縦横斜めに走っていて視覚的に楽しい。またリビングから廊下を眺めたときも、斜めの配置によりすべての部屋が一望できる構造になっている。それが騙し絵的な視覚効果を生み、小さな空間ながらも奥行きとリズムが感じられる。